

不快エピソードに対する認識の変容と
感情内容による比較○神谷俊次 伊藤美奈子
(南山大学) (お茶の水女子大学)

Holmes(1970)は、エピソードを体験したときの感情よりも、そのエピソードに対する現在の感情のほうが記憶にとって重要であると論じている。また他者との信頼感形成や人との関係性の発達にとって、過去のエピソードに対する不快感情を拭い去ることの重要性が示唆されている(伊藤・神谷, 1997)。本報告では、不快エピソードに関する感情や認識が時間経過とともにどう変化していくのか、その不快感の内容によって先の認識に違いが見られるかどうか検討することを目的とする。

【方法】 被験者 大学生91名。手続き エピソードの記述：これまでに経験した不快なエピソードの生起時期、内容、感情を簡潔に記述するとともに、現在そのエピソードをどの程度はつきり思い出せるか(鮮明度)、不快な感情がどの程度残っているか(不快感持続)、いい思い出に変化しているか(不快感昇華)、自分の考え方に影響を及ぼしているか(影響度)、自分にとって必要な出来事であったか(意義)を3段階で評定させた。先の報告(伊藤・神谷)では、回答者個人に焦点づけて分析を行った。本報告では、回答されたエピソードそのものの内容を分析対象とする。

【結果と考察】 ①エピソードが生じた時期による各得点の比較 時期に関しては<幼稚園><小学校時代><中学校時代><高校時代><大学以降>(以下略記)に区分した。時期ごとにエピソードに対する各得点の平均を求めたところ(表1) [鮮明度]については(F=18.64、以下すべて $p<.01$)、<中学>までは低く<高校><大学>と現在に近づく時期ほど高かった。[不快感持続度] [影響度] [重要度]もほぼ同様の傾向にあり(それぞれF=15.44、F=14.90、F=4.19)、幼少期のエピソードほどその不快感は緩和されるという特徴を示す。これらに対

し[不快昇華]では(F=5.22)、<中学>までは高く、<大学>では最も低い。最近のエピソードほど、鮮明に想起され、不快感もそのまま昇華されることなく持続し、自分に対する影響度や重要度も強く認識される。

②「当時の感情」の分類と、時期による比較

感情については「恥ずかしい・悲しい・辛い・恐怖」を[対自的不快]、「ムカついた・怒り・悔しい」を[対他的不快]とし、これら2つのエピソード群を抽出した。 χ^2 検定の結果、[対自的][対他的]エピソードの比率(表2)は、生じた時期によって差が見られた($\chi^2=25.22, p<.01$)。<幼稚園><小学校>では[対自的]が多いのに対し、<中学><高校>でほぼ同率となり<大学>では[対他的]のほうがやや多くなることが示唆された。

③不快感の内容(当時)による5得点の比較

まず感情内容(2水準)と時期(5水準)を2要因とする分散分析を行ったところ、交互作用は見られなかった。[対自的][対他的]ごとに5得点の平均を求め(表2)、2群間の差を検定したところ、[鮮明度]以外で有意な差が認められた(不快感持続： $t=3.61$ ；不快感昇華： $t=3.78$ ；影響度： $t=2.81$ ；意義： $t=4.24$ 、以上すべて $p<.01$)。[対自的]のほうが不快感は快化方向に変容されやすく、影響度や重要度についても高く評価されている。

表2 不快感の内容による各変数の平均

	対自的不快 273件	対他的不快 212件
鮮明度	2.45(.65)	2.50(.64)
不快感持続	1.66(.80)	1.89(.89)
不快感昇華	2.04(.83)	1.80(.86)
影響度	1.91(.80)	1.67(.83)
意義	2.23(.78)	1.84(.86)

表1 想起した出来事の時期による各変数の平均

	幼稚園時代 N=24	小学校時代 N=128	中学校時代 N=140	高校時代 N=185	大学時代 N=94
想起数					
鮮明度	2.38(.77)	2.22(.70)	2.38(.68)	2.66(.52)	2.83(.43)
不快感持続	1.25(.61)	1.45(.72)	1.67(.83)	1.74(.84)	2.23(.84)
不快感昇華	2.38(.71)	1.99(.85)	2.06(.87)	1.94(.84)	1.65(.84)
影響度	1.46(.72)	1.55(.76)	1.64(.75)	1.88(.85)	2.29(.80)
意義	1.50(.78)	1.98(.87)	1.95(.81)	2.16(.82)	2.09(.82)
対自vs対他%	91.7-8.3	67.7-32.3	47.4-52.6	45.9-54.1	40.6-59.1